

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-18

紺碧の鏡(鹿野政直著, 『沖縄の淵 : 伊波普猷とその時代』, 岩波書店, 一九九三年)

我部, 政男 / GABE, Masao

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

337

(終了ページ / End Page)

343

(発行年 / Year)

1993-12-11

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002671>

〔書評〕

鹿野政直著 『沖繩の淵―伊波普猷とその時代』 岩波書店・一九九三年

紺碧の鏡

我部政男

真夏の大海原に漂う琉球列島は、あたかも紺碧の鏡に映る影のようである。影の実相を限りなく追い求めた人物が、本書の主人公伊波普猷である。

著書の鹿野政直氏は、日本史家であり、特に近代思想史の分野で数多くの著作を世に問う精力的な学者である。関心の広さ、分析の深さでは、つとに定評のある著者が、沖繩に関する研究の延長線上で、はじめてとりくむ本格的な伊波普猷研究である。本書の序の冒頭をこう書き出している。

深く掘れ、己わがの胸中の泉 余所たよて水や汲まぬごとに（一九一一年）

こう詠んだ伊波普猷（一八七六―一九四七年）という存在に心をめぐらすとき、時代はその矛盾の体現者、それゆえに表現者を生むものだ、との念に駆りたてられずにはいない。彼は、まるで

クリオの召命を受けたかのように出現して、沖縄にとつての古典中の古典たる「おもろさうし」の検討に没頭し、沖縄学という範疇を打ちたてた。

この短い文書の中に、「沖縄学の父」と称される伊波普猷とその時代との関係が、端的に表現されている。また書名の「沖縄の淵—伊波普猷とその時代」の淵の意味を解く鍵が、秘められているようにも思われる。とかく伊波のことは、自らの立脚点を自力で掘り下げ、その行動を自らの使命としていたことを語っているが、あまりにも自覚的であった伊波普猷を著者は、「クリオの召命」と表現している。このことの意味は文字どおり深く、そして重い。

敗戦二年（一九四七・八・十三）目のまさに混乱と貧困の中で、伊波普猷は死を迎えた。その後は、しばし記憶の彼方に見え隠れしていた。戦後のアメリカ統治下の復帰運動の高揚の中で、伊波普猷は確実に郷土沖縄を「代表する知識人」として、時期の「状況とのかかわりのなかで宣伝されたまた批判」されながらとりあげられてきた。したがって、この政治的潮流の中での解釈と主張には、当時の人心が色濃く反映されていた。伊波普猷の生きて活躍した時代、自らの生を伊波普猷の課題に重ね合わせて状況を認識した戦後の時代、その時代は、戦前と戦後とたしかに異なる。にもかかわらず、この時代は、伊波普猷の認識のありようによって、分ちがたく結びついている。時代と状況の変遷と変化は、同一の人物の評価と関心に対しても大きく異なってくる。恐らく、さけられない事態の進行であろう。またそれ自体が、社会意識の一つの流れを形成することになる。

著者の鹿野氏は言う。「一九七〇年代が過ぎると、伊波への関心は潮の引くように薄れた。八〇年代に入って沖縄は、沖縄を中心にぐるりと大きな円を描くかたちでの文化像を打ちたてはじめたことくみえる。（中略）ヤマトへのこだわりに終始したとの観を呈する伊波は、もはや旧いと意識されるにいったたのであろう」と。著者の関心は、この歴史意識の変化を伊波普猷の内面的問題点としてとりあげ、本書においても一度、伊波の内部を経由して、沖縄思想史とヤマト思想史の交差を通してとらえなおす雄大な試みを展開しているのである。

この認識の差異を状況認識の変化に求めずに、伊波普猷の生き方の固有の変化の中に求めている。つまり、著者鹿野氏は、時代の表現者としての伊波普猷の自己意識の推移を克明に跡づけ、近代日本と沖縄とを時に対峙させ、時に統一させながら、傷つき翻弄される伊波普猷の詳細な評伝を完成させた。

この序（文）は、本書全体を読み終えて再び静かにページをめくるとき、伊波の苦闘と傷痕が著者鹿野氏の伊波普猷への思い入れとともに、ある鎮魂のごとき安らぎをもって読者の胸に迫るものがある。本書は、私には日本近代史から「沖縄学」への最大級の贈り物として本書を受けとることが、おそらく可能になるだけでなく、またそのことは何人も異存ないであろうと思われる。

本書によって、同時に「沖縄学」の周辺を同心円に限りなく広げ、豊かな土壌を提供することを約束することになる。

本書は一章の「世替りを受けとめて」より、「新知識人の誕生と帰郷」、「古琉球」、「精神革命の布教者」、「転回と離郷」、「孤島苦」と「南島」意識、「父」なるヤマト」、終わりの八章「亡びのあとで」までとなっている。それぞれの章で、興味深くまた、取り挙げるべき論点も多岐にわたるはずである。それにふれることは、私のなしうることではない。沖繩学の範疇が、それこそ沖繩関係学へと限りなく国際化・総合化していくことと根をおなじくしているであろう。それらは、この文の範囲外にあることを、あらかじめお断りしておかねばならない。

私が、本書で強くひかれところは、伊波普猷の私生活の側面と研究生生活の接点を沖繩の歴史的現実と研究課題との切り結びを、つねにからめて究明していく視点であった。伊波普猷の人間観が表出する対女性観の究明に、著者の鹿野氏は批判の手をゆるめない。伊波普猷の結婚、そして家庭という私的環境の解明には、多くの史料分析がなされているが、そこにはまた、不思議な魅力と魔力が併存しているようにすら思えた。

明治の世替りが土族の伊波家を襲ったとき、少年伊波の心に強く印象づけたのは、何であつたらうか。その時を起点として、伊波普猷は自己形成の旅に出発することになる。沖繩の歴史的な現実の政治に目覚め、伊波が経世家の意識に強く導かれながらも、最終的にその道を選択せず、結局、別の道を進む。その選択が、いよいよ「伊波の懊悩」を深めることになる。

新知識人としての伊波普猷の活動は「沖繩ならしめている文化的な根の尊重を説く」ことから始まり、同時にそこには、後年多くの人々によっていくたの議論を惹起させることになる。沖繩とヤマト文化の類似のものとする認識が強く働いていた。伊波の大学卒業後の帰郷の活動は、史料収集と講演であり、後の「琉球の復元」活動の肥沃な基盤を自らの努力によって作り上げたのである。ごく自然にその収集した史料を基に、精力的な著作活動を展開する。

「琉球処分」Ⅱ奴隸解放論は伊波普猷のユニークな学説である。重層的で屈折も多いこの学説の解釈をめぐっては、実にさまざまな議論がなされてきた。単純な歴史の発展理論では、とても捉えにくい論理であることは多言を要しないであろう。戦後の復帰運動の民族主義的傾向と、明治の琉球処分の国民国家の形成の波長とを同一的な側面とみるならば、伊波の民族理解の中に、統合化していくネーションステイツのイデオロギーとしてのナショナリズムが全面的に開花してくるかに見える。この立場から伊波の果たした歴史的な役割をみようとする見方もないわけではない。しかし、著者の鹿野氏は、それは伊波の真意と視点を見失うことになるかと鋭く指摘する。

伊波普猷の啓蒙思想の中には、むしろ、琉球人のエスニシティをきわだたせる主張が濃厚である。この沖繩文化の独自性に注目すれば、統一国家形成のナショナリズムに対して伊波普猷の主張と方法は、根底から激しい批判の矢を放った人ともとれる。著者の鹿野氏は、伊波の思想の「一見両義的性格」を柔らかく解き明かし、屈折した伊波の精神を原形のままに復元してみせる。その手法はきわめて説得的であり、伊波の文体の多義性を抽出するに際して、その論理の明快さは、本書の叙述の魅力

の一つとなっている。

人物研究において、全集の果たす役割には、絶大な貢献がある。ところが、伊波普猷「古琉球」のように長期間のあいだ数回も版を重ねた場合、しかも微妙に思想の表現に変化のあるとき、すべての版に忍耐よく、丹念にあたるしかない。著者鹿野氏の「古琉球」分析の手法は、人物研究の格好のケーススタディーとして開示する。伊波普猷の「古琉球」の場合は、改廃、追加を繰り返す単純な法律の現行法原則主義にこだわることはできないことを示す。

著者は極めて慎重に、淵ということばを書名に選んでいる。本書の中で、とりわけ大きな「変化」を自覚するとき使われている、孤島苦々島ちやびの認識と悲愴な孤独感を共有した伊波普猷と彼の生を受けた沖繩に冠せられていることばである。伊波の彷徨する悲哀感こそが、淵の原質をかたちづくっているのかもしれない。変化を歴史研究の重要課題とする、ハーバート・ノーマンが「詩神の苑に立つて」述べた考えと一面において共通するところがあるように私には、感じられる。

伊波普猷の近くについて、ともにある時代を生きた比嘉春潮や金城芳子や仲宗根政善等の証言の重みが、燠銀の如く本書に散りばめられている。その一人である比嘉春潮が、かつて「伊波普猷先生の隣にお墓を、」と問われて、「伊波普猷先生の隣は、どうも、」神妙につぶやく。その真意は不明であるが、著者鹿野氏が伊波普猷の遺族に会って、伊波普猷の墓が浦添城の英祖王の墓の上近くに設けられたことに違和感をもっていることを、率直に書き記している。その背後に、比嘉春潮の口ごもった

あのつぶやきの真意を暗示しているようにも受けとれる。つまり、世俗的な権力から無縁な清貧の生き方を選んだはずの伊波普猷が、死後、世俗的な価値の世界に引き戻される。それを、伝統的権威のセジ意識の差異に悩む遺族の構図を配したコントラストは、不思議な衝動力をもって伊波普猷の置かれている状況を、象徴的なまでに鮮明に照射している。

おそらく本書は、伊波普猷研究の指標として、多くの人に読み、語り伝えられていくであろうと私は思う。著者の鹿野氏の「近代日本の民間学」(岩波書店一九八三)、「戦後沖繩の思想像」(朝日新聞社一九八七)、「歴史のなかの個性たちー日本の近代を裂くー」(有斐閣一九八九)等の成果とともに、著者の営為によって伊波普猷の最も確実な「紙碑」が、読者の心中に打ち立てられたことを私は信じる。